

崩れた夜

小宮実紗

私を好きだという人は全員どうかしているの。
彼はとびきりどうかしているの。

触れてみたくなる冷たい頬の骨。

春の夢の中で、そう思う。

昼の熱を知らない朝霞と水の匂い。

儚い現実で、そう思う。

食パンとチーズと牛乳、そしてスーツを着た彼。

特別な、鼓膜にこびりついた生活の、風景。

薬八錠と水と唾液。そして夜が少しだけ早く進む魔法のパジャマ。
いつもの、愛と呪いと祈りの、風景。

夜が崩れるたび明け方が遠くなっていく。

静かな夜。冷蔵庫のうなる声が聞こえる。

虫一匹すら殺したことがなさそうな無垢な顔をして肉を喰らう彼が、見た
い。

コンクリートの廊下。赤子のように重たく沈んだ私を彼はただ見下ろしてい
た。

睫毛に縁取られた瞳は水の膜を張っていて、こちらを真っ直ぐ見る視線は生
の気配しか感じなかった。死なないことが特技だと信じて疑わなかったの
に。

彼は肉ではなくて、私の心を喰らうことしか出来なくなっていた。

騒がしい夜。私のうなる声が五月蠅い。

私の隣で少しずつ歩き方が変わっていく彼を、知っている。

白塗りの部屋。彼が激しく咳き込むたび、空間が桜色の泡で充滿していく。

泡はとても小さく、柔らかく、壊れやすく、それなのに何よりもしぶとく私の肺に絡みついた。

壁のひび割れが夜を飲み込んでしまえばいいのに。

月明かりが脈打つ臓器に変わればいいのに。

ベッドの縁にしがみつき、崩れていく彼の呼吸のリズムを数えていた。

影と影が絡み合い、壁を撫でて、徐々に輪郭が薄くなっていく。

私を好きだという人は全員どうかしていたの。

彼はとびきりどうかしていたの。

私だって、どうにかなりたかった。